

「さようなら、礼士さん」

私は少し迷ってから、付け加えなかった。  
愛してる。

\* \* \*  
\* \* \*

年が明けた、というにはやや遅すぎる。秋田は一年で最も寒さが厳しい時期を迎えようとしていた。秋田駅で礼士さんが襲われた事件から既に2週間が経っていた。動乱、そう呼ぶのが相応しい日々だった。

誰が善で、誰が悪か。私は善なのか、私は悪なのか。生き残った者として、そればかりが問われた。

南風 こまち

そう、生き残ったと断言できるのは私だけだった。そして、今日。その事件に大きな動きがあった。

釜田さんの愛車、トヨタ・マークIIは脱兎のごとく交差点を抜けた。そのまま横転しそうな勢いで病院のロータリーに突っ込んだ。

「確氷、大和、早く行け！」

釜田さんのだみ声に急かされるよりも早く、私は車を駆け降りました。

受付に駆け込むと、看護師が小走りに案内してくれた。エレベーターホールに行くも、タイミング悪くえんじ色のドアが閉まった。私は次のエレベーターを待ち切れず、薄暗い階段を駆け上がった。

息を切らしながら向かった先は317号室。

表札の入院患者名欄には『剣礼士』と書かれていた。

\* \* \*  
\* \* \*

人は死ぬ間に走馬灯が流れると聞く。でも、僕が今見ているのは走馬灯にしてはゆつくりすぎるような気がする。

現実なのか？ それにしては、今までの前後関係があまりにもあやふやだ。

じゃあ、僕が今見ているものは何だろう？

そう思っていたら、僕の視覚が動いた。自分で動かしたんじゃない。自分の意思とは無関係に視覚が動いた。その視覚は手元の地図に目を落とす。

『あのアパートか』

誰かの思考が僕の脳内に流れ込み、視覚がまた動いた。なぜだろう、前にもこの思考を辿ったような気がする。

建物が見えた。おんぼろなアパートだ。背後には海が広がっている。

「これは……!?!」

僕はようやく理解した。僕に流れ込んでくる視覚の持ち主、思考の持ち主。『彼』は、錆び付いて焦げ茶色になった鉄階段を上る。

そして、一番奥の部屋に向かう。

表札にはかすれた文字で『井上』『確氷』の文字。

僕の理解が確信に変わった。僕はインタホンを押す。錆び付いた音がした。

部屋の中から足音がして、ドアが軋んだ。

中から女性が姿を現した。ほっそりとした体躯を少し怯えるように震わせて、似合わない濃さの化粧を施した顔を彼に向ける。

『初めまして、連絡した剣と申します。本日からお世話

になります、管理人さん』

彼は彼女に頭を下げた。

僕と、と言うよりも彼と。

彼と彼女が……釵札士と碓氷瑞穂が出会った瞬間だ。

これは、僕の過去だ。

あの頃の釵札士の中に、僕はいる。

\* \* \*

これが僕の記憶の中なら、いつの記憶だろうか？

海の香り。

錆と汚れで茶色い外観をしたボロアパート。

そこに入居した初日ということは……4年前、つまり

2010年の春だ。

あの頃の僕の職場は仙石線、仙台と石巻を結ぶJR線

だった。

僕は彼の視覚を通して、目の前の瑞穂さんを見る。こ

の時は瑞穂さんとも碓氷さんとも呼ばず、管理人さんとい

う存在でしかなかった。

でも、彼も違和感を覚えたみたいだ。その違和感は今

の僕の中にもずっと引つかかっている。

化粧が濃い。地肌の色を見せまいとするかのようにけ

げばばしい。はつきり言って似合っていない。

歩き方、態度がおどおどしている。何かに怯えるよう

に。痛みを堪えるように。

部屋の中に目線をやる。彼の記憶の中ではそこまで気

を回していないのか、霞がかかったようにはつきりしな

い。でも少なくとも荒れた室内であることは分かった。

安煙草の匂い、ひっくり返った酒瓶、脱ぎ散らかされた

男物の服、……瑞穂さん以外の人間の存在は明らかだっ

た。

じゃあ、この部屋の男が井上なのか？

ということ、瑞穂さんは……。

その時、記憶が大きく動いた。僕が見ている記憶が別

の物に切り替わった。

\* \* \*

彼の視覚は、今度は部屋の中に存在した。万年床に寝

そべりながら小説を読んでいる。

この記憶は……えーと、いつのだ？

しかし、それを思い出すよりも前に視覚に動きがあっ

た。

小さく揺れた。

視覚が、小さく揺れた。

自分で揺らしたのではない。

この揺れに、僕は記憶のありかを思い出しかけた。

でも、それを許さなかった。

彼を激震が襲った。

2011年3月11日。

地獄が始まった。

\* \* \*

あの日は雪がちらついて、寒い一日だった。

揺れが収まるまでが、一生よりも長く感じられたこと

は今でも鮮明に覚えている。そして、揺れが収まった後

のことは、もはや記憶を辿るまでもない。

揺れが収まり、彼はそろそろと体を起こした。とっさ

に布団で頭を守っていたが、起き上がると布団は頭から

落ち、視界が晴れた。

滅茶苦茶だった。部屋の中だけではなく、部屋そのも

のが。

白いものが天井から落ちてきた。埃ではない。雪だ。

見上げると屋根が裂け、曇天が顔を覗かせていた。

立ち上がると体がよろけた。怪我はしていない。床が

傾いている。窓の外を見ると海が見えなくなっていた。

目に入ったのは倒壊したブロック塀。

埃を吸い込み咳き込んだ。すると、別の匂いがした。

煙の匂いだ。

地震の次の厄災。それは火災だった。

彼は逃げようと、斜めになった床の上をよろけながら

玄関に向かった。ドアがひしゃげて開かなかった。二度、

三度と体当たりをする。五度目でドアが軋みを上げ、六

度目で隙間ができた。煙の匂いが一気に濃くなり、目を

刺した。七度目の体当たりで隙間が広がり、彼はそこか

ら巨躯をねじり出した。

外に出る。彼の鼓動は爆発しそうな勢いで、完全に我

を忘れかけた。

彼の部屋は二階だった。二階のはずだった。それなの

に、通路の柵を跨げば地表に降りられる。ボロアパート

の一階が完全に潰れていた。町は灰色に染まり、不穏だ

った。

視界の端に光が映り込んだ。赤い光、炎だ。彼は光の

方向に顔を向けた。

『管理人さん……!?!』

彼の血の気が引いた。体が先に動いた。煙を掻き分け

ながら通路の奥に走り、ドアに手をかける。開かない。

体当たりして吹っ飛ばした。

その部屋の中で、彼が見たものは。

『管理人さん！ 大丈夫ですか!』

彼の目に入ったものは。

うずくまる瑞穂さん。

怯え、錯乱し、縮こまっている。

でもその目は、暴走を始めた台所の炎ではなく、他を

一点に見つめている。

横倒しになった食器棚。既に延焼が始まりつつある。

その食器棚の下から、薄汚れた男の四肢が僅かに覗い

ていた。

男の体から乾ききった血の海が広がっていた。  
瑞穂さんは、血を被っていた。  
彼の鼓膜に耳障りな音が届いた。

『大津波警報が発令されました。高台に避難して下さい……』

この時、彼はまだ自覚していなかった。

地獄は始まったばかりだった。

火責めの次は水責めだった。

『早く逃げましょう！ さあ！』

彼は力づくで瑞穂さんの手を掴み、背負う。掴んだ手から乾ききった血の粉末が落ちた。

「礼士さん！」

瑞穂さんが叫んだ。

ん？

でも、目の前の瑞穂さんは……まだ、彼のことを、僕のことを下の名前では呼ばないはずだ。

「礼士さん！！」

また瑞穂さんが叫んだ。……いや、違う。この声の主は、目の前の管理人さんではない。

「礼士さん！！！！」

僕は目を覚ました。

\* \* \*  
最愛の人が、ようやく意識を取り戻した。

\* \* \*  
気が付くと僕は、見知らぬ部屋で横になっていた。

瑞穂さんが僕を見ていた。

そして、そのまま僕に覆いかぶさり、泣き崩れた。

\* \* \*  
怒涛の数日が過ぎた。

死の淵から生還した礼士さんを待っていたのは、まずは入院生活、そして警察の事情聴取だった。

背中への傷は大きく、ひと月以上入院することになった。

意識を回復してから一週間は面会謝絶で、それが解禁された後もしばらくは警察が入り浸り、礼士さんの面会時間を使い切る日々が続いた。

結局、面会できるようになったのは意識を回復してから二週間近く経った頃だった。

正直、会いに行くのは気が重かった。事件の発端となった身として、全ての始まりとなった身として、どうしても気まずかった。

でも、行かなくちゃ。

私の決意を、私の全てをあの人に伝えるために。

\* \* \*  
夕暮れが迫る病室に入ると、礼士さんはうつぶせになっていたまま眠っていた。眼鏡をかけたまま、新聞を開いたままのところを見ると読み疲れて寝落ちしてしまったようだ。穏やかな寝顔だったが、頬の傷跡が痛々しかった。

生きているということは、この人はまた笑うことができるということだ。そう考えると心は晴れずとも、緩むくらいにはなる。

待つこと数分。目が覚めた礼士さんは私に気付くと、むつくりと起き上がろうとして顔をしかめた。

「安静にしていけないと駄目よ、まだ傷が塞がっていないんだから」

「ああ、うん」  
「やつと会えたね」

「礼士さんは少し疲れた笑みを浮かべた。私には少し顔を伏せた。時間的空白が心理的空白に変わ

り、どこから話そうか困った。

「聞いたよ。釜田さんと大和さんが血を分けてくれたって。後でお礼を言わないとね」  
私は口を開かず、礼士さんに話題を任せる。  
「瑞穂さんもありがとう、助かったよ」  
「そんな……私は」  
不意にお礼を言われて、決心が鈍る。  
「大丈夫かい？」  
……この折に至ってまで、この人は私のことを……！  
「ええ、平気……警察の事情聴取はどうだったの？」  
無理矢理自分の口を動かし、話を進める。進めたくない。進める。  
「矢野警部に色々話を聞かれたけど、事件の概要しか知らされていないんだよ」  
事件の概要……つまり、この人はもう知っている。  
「辛かったね、瑞穂さん」  
礼士さんの垂れ目が私を見る。穏やかに、慈しむように私に声をかける。  
「もう大丈夫。全部、終わったんだ」  
終わった。  
違う。  
「そうじゃない、礼士さん……終わらせたのよ」  
私の眉根がきりきりと歪む。  
私は、礼士さんの二の句を遮る。  
「私があつた男を殺した」  
「私があつた男を殺した」  
「私が笠原諒人を殺した」  
「私が笠原諒人を殺した」  
\* \* \*

「うん……聞いたよ」

僕は口調を変えない。変える必要もない。瑞穂さんに非が無いことは明白だし、非があったとしても何も変わらない。

「礼士さんが眠っている間、私も取り調べを受けたのよ」  
そのまま僕の最愛の人は、事件のあらましをぼつぼつと語っていく。

「私にこんなことを言う権利は無いのかもしれないけど、これだけは信じてほしい。私は殺すつもりなんて無かった。ただ……あの男を押しつけようとして押し倒したら、そのまま肘掛けに頭を強く打って……首の骨が折れたみたいで……」

僕はそこから先を無理に言わせなかった。何度も思い出させて、苦しめることはない。

「端的に結論だけ言うと、私の正当防衛が確立した。留置されて調書は取られたけど、結局は無罪放免。不起訴になったわ」

いくら瑞穂さんに非が無いことが分かっている、改めて不起訴の報を受けると安堵した。聞くところによると、瑞穂さんが事前に笠原からの性犯罪を受けたことや、瀕死の僕を見て極度の恐怖に陥ったことを背景に、列車内に設置されていた防犯カメラの映像が決め手になったらしい。

「あの男がどうして私や礼士さんを狙ったのかは警察の調べでは分からなかったみたい。でも、自宅捜索であるの男の自宅に入ると、私や礼士さんを調査していた痕跡が色濃く残っていた。そこから調べると、興信所との繋がりが明らかにあったのよ」

「興信所？」

そのまま傾聴する。どうやら、笠原が僕に目を付けた

のは東京駅での映像を観たことが発端のようだ。僕はあの日と同様に、またまた瑞穂さんに救われたわけだ。

「最初にホテルに行った時のこと、覚えてる？ その……私のお父さんの話をした時のこと」

「うん、あったね。大曲の花火大会の頃だっけ？」

「そう。……あの時の様子も撮られていたみたい。揃ってホテルから出る時を」

そうなると、僕と瑞穂さんはかなり長期間に渡って目を付けられていたことになる。

「興信所と言っても、複数の情報源があったみたいなのよ。霧降荘で一緒になった押鳥夫妻、あの二人も探偵社の人間だったけど、こんなことになるとは全く思わずに私や礼士さんの情報を興信所に流したみたい」

思い出すのに少し時間がかかったけど、あの二人か。興信所や探偵社同士で情報をやり取りすることもあるだろうし、その一環なのだろう。

「それだけじゃない、去年の春に私の部屋で起きた爆発あれも笠原の仕業だった。家から粉塵爆発の資料と、私の旧住所を紐づけたデータが出てきたみたい」

「ということは、あの男の本命は瑞穂さんだったわけか……でも、何で？」

瑞穂さんは言葉を継ぐ。

「そのデータには、別の住所も紐づけされていたの。赤倉翔一、覚えてる？ 叶ちゃんの婚約者だった人」

大和さんの婚約者？ 少しの時間を置いて、思い出した。

「トワイライトエクスプレスの事件で、小田原で被害された人か。白雪が犯人だった事件だ。そういや、笠原も車内で妙な事を言っていたな。あの事件に一枚噛んでいた、みたいなことを」

瑞穂さんは頷いた。

「あの事件で、白雪が赤倉さんを殺害した後に、被害者の自宅に何者かが侵入した痕跡があったって話があったのよ。覚えてる？」

「……その侵入者が笠原か。そうだ、思い出した。同じことを襲われる直前に気付いたんだよ」

どうも襲われた当時の記憶は曖昧だ。

「赤倉宅を粉塵爆発に見せかけて爆破し、証拠を隠滅するのが彼の役割だったみたい。結局そのようなことは無かったけど。多分、粉塵爆発だけで家を一軒丸ごと吹き飛ばすことは難しいって結論に至ったんじゃないかって、大塚刑事は言っていた」

「そうか、瑞穂さんは大塚刑事から取り調べを受けたんだね。……家を吹き飛ばすのが難しいって、つまり」

話が読めた。

「私の部屋の爆破は予行演習だったみたいなのよ。結局あの爆破でも建物を全壊させることはできず、私を殺すこともできなかったから諦めたんじゃないか、って」

やっぱり。理解はできた。でも、納得できない。

「どうして笠原は、執拗に瑞穂さんを狙ったんだろう？」  
瑞穂さんの表情が今までになく歪んだ。

「どうしてあの男が私の住所を知っていたのかははっきりしないけど、白雪から聞いたんじゃないかって説がある。あの男、釜田さんの元妻だからそこから消息を辿ることができたんじゃないかって」

僕は一つ頷く。でも、気にかかるのはそこじゃない。

「瑞穂さん……結局、あの男は何者だったんだい？」

部屋の中が薄暗くなった。とうとう陽が落ちた。僕は手元のリモコンで部屋の灯りを点ける。体を少し動かし

ただけなのに、背中への傷に鈍い痛みが走った。

「礼士さん」

瑞穂さんが僕を見た。今気づいたけど、眼鏡が新しくなっている。前までは角形だったけど、今は楕円形のアンダーリムだ。色は変わらず青のまま。

「今から、私が話すことをよく聞いてほしいの」

その吊り気味の目は、正面から僕を見据えようとしてつも、揺らいでいる。

「……辛いことなら、無理に話さなくてもいいんだよ？」

「駄目。それは絶対に駄目」

頑なに否定する。

「とても大事な話なのよ」

その姿は、まるで自分自身に無理矢理言い聞かせているようだ。

「私、心当たりがあるのよ。どうしてあの男が私を、礼士さんを襲ったのか」

「えっ!？」

爆弾発言だった。

「……とりあえず、続きを聞かせてよ」

瑞穂さんは重々しく口を開く。いや、こじ開けると言った方が適切かもしれない。

「これは、警察にも話していいの。あなたがこの話を聞いてどうするかは……任せるわ」

そう言つて、瑞穂さんは一つ深呼吸をした。

「私、あの男の動機を知ってるのよ。なぜ私を、なぜ礼士さんを襲ったのか」

口を挟むことはしないで。彼女は今、何かと闘っている。邪魔はしないで。おこう。

「私に対する怨恨。それが動機よ」

瑞穂さんの目が死んでいく。

「つまり、あなたは巻き添えになったのよ、礼士さん。私の一番大切な人だから。あなたが死んだら私は深く絶望する。それがあの獣の狙いだった」

……。

「だから、この話はなぜ私が恨まれるのか……そこに行き着くわ」

一つ頷き、続きを待つ。夜が迫り、病室が少し冷えてきた。

「礼士さん、落ち着いてよく聞いて」

静かに待つ。瑞穂さんは両手を握りしめ、小刻みな体の震えを抑え込む。

そして。

「私は人を殺した」

\* \* \*

先に沈黙を破つたのは礼士さんだった。

「……ええと、それは……笠原のことかい？」

そう尋ねる恋人の目には、僅かな戸惑い。そして不安の色が現れていた。

「違う」

私は冷徹に、きっぱりと否定する。

「笠原は二人目のよ、礼士さん」

数秒の間があった。

そして、礼士さんの垂れ目は驚愕で見開かれた。

「じゃあ……じゃあ……!？」

「ええ」

私は、決意が揺らがないうちに、自分を追い詰める。

「これは、私の過去の話。今まで誰にも話さなかった、私の全てよ」

決意の揺らぎが、声の震えになった。

「私は人を殺した。……笠原だけでなく、もう一人」

\* \* \*

もう戻れない。その事実が、涙になった。

父が殺人で逮捕された。その知らせは、私の人生の暗転を告げるものでもあった。

あの頃、私はまだ高校生だった。実の母親は父親の浮気相手で行方知れず、育ての母は病死し、父親は殺人犯。

高校を中退して逃げ出した私が一人で生きていく術などあるはずがなく、また知るはずもなかった。

私を引き取り、養ってくれる物好きはなかなか見つからなかった。多くの親戚、知人の元を巡ったが、結局は蔑みと共にたらい回しにされるのがオチだった。ドヤ街の簡易宿泊所を転々としてたり、路地裏で段ボールにくるまって眠ったこともあった。

だからこそ、私はあんな遠くまで辿り着いたのだろう。今や思い出したくもないあの日。私が辿り着いたのは石巻だった。

産みの母親の居場所を突き止めた時、私にはもう他の場所は残されていなかった。この国は、身寄り居場所を失った若い女を守るほど暖かくもなく、美しくもなかったのだ。

インターネットというツールに出会うのが遅かったために出会うまでは時間がかかったが、産みの親は調べたら拍子抜けするほど簡単に見つかった。彼女は会津といった。下の名前はもう忘れてしまった。ツイッターで偶然見つけた。全身に濃いタトゥーを施したヌードを晒すような、哀れな虚栄心の塊だった。

それでも、私にとっては最後の希望だった。

その希望に縋って辿り着いたのが、石巻のポロアパー  
トだった。

彼女は予想に反して私を暖かく出迎えてくれた。同棲  
していた男もそうだった。背が低く、小太りな坊主頭で、  
いけ好かない顔をしていた。私はその夜から、小汚い部  
屋の小汚い住民になった。

そう、この時点で私は気付くべきだったのだ。これは  
罠だと。希望ではなく、地獄への入り口だと。

翌日。会津は蒸発した。

\* \* \*

男は井上友三と名乗った。会津が蒸発したその日、私  
はこの男のものになった。初めて男を思い知らされた。  
殴られ、蹴られ、唾みつかれ……これ以上は語ることも  
辛い。会津が蒸発した理由を悟った。

私は会津に倣って濃い化粧を施すようになった。虚栄  
心などではない。そんなものはとうの昔に捨て置いた。  
井上による傷を隠すには手っ取り早かったのだ。

高校を中退し、ろくに学ぶこともできなかった私は無  
力だった。無力とはすなわち、逃げを知らなかった。

私は蟻地獄に閉じ込められたかのように、他に居場所  
が無かった。自分だけの居場所を作ることもできなかつ  
た。私の心は壊死していった。

生ける屍、そう描写するのが相応しかった。

そんな折に井上が連れてきたのが笠原だった。私にと  
ってはどうでもいい存在だった。どこぞで知り合ったのか、  
何をしているのか、そんなことは知る由もないし、知る  
うともしなかった。私にとっては、相手をさせられる人  
数が、体の傷が倍になったただけだ。

あの時に命を絶たなかったのはなぜか。簡単な話だ。  
私は臆病で、生きる勇氣も死ぬ勇氣も無かった。それだ

だけだ。

あの時に抵抗しなかったのはなぜか。簡単な話だ。私  
は臆病で、非力で、逆らう勇氣が無かった。逆らったと  
ころで、相手は男二人だ。逆上してもっと痛い目に遭う。  
だから私は従順な犬だった。それだけだ。

刃という男が入居したことも、初めは私の人生に何の  
関わりも無かった。

私の全てが変わったのは、あの日だった。

\* \* \*

私は運命なんて信じない。これっぽちも信じない。  
でも、あの日のことだけは、全てが最初から運命とし  
て仕組まれていたのではないか。時々そう思うことがあ  
る。

なぜあの日、私の心に抵抗する意思が湧いたのか。そ  
の理由には、何一つ論理的な説明がつかないのだ。だか  
らあのタイミングは、運命のせいにして片付けるしかな  
い。

それは、私が台所に立っている時だった。

井上の手が私に伸びた。

私を強姦するのか、私を痛めつけるのか。そのどちら  
かだった。あの男の手はそのためだけに存在していた。

しかし、その時の私は道具を手にしていった。

私は人生で初めて人を脅した。

包丁を片手に、井上を脅した。

近付いたら刺す、そう脅した。

しかし、私には脅しの経験が、ノウハウが無かった。

井上してみれば、私の脅しなど子供騙しに過ぎなかつ  
たのだろう。

井上はためらいなく、私に薄汚い拳を突き出そうとし  
た。何度も何度も、数えきれないほど私を襲った拳だ。

有り体に言えば、私はパニックになった。  
過去に何度も襲われた。その記憶が、私の体に乗っ取  
るのは容易だった。

肉を穿つあの感触。

それは、今も生々しく手に残っている。

噴出する血の粘り気、生温かさ。

それは、今も生々しく手や顔、髪に残っている。

獣の断末魔。

それは、今も生々しく鼓膜に残っている。

呆気なく崩れ落ちる獣の四肢、血の紅さ。

それは、今も生々しく瞳に残っている。

私が井上を殺したという事実。

それだけが、この世のどこにも残っていない。

私の視界が激しく歪んだ。私の視界を激震が襲った。

それは、直後だったかもしれない。数時間後だったか  
もしれない。

10の日付まで×印をつけたカレンダーが宙を舞つ

たことは、なぜか鮮明に覚えている。

\* \* \*

高台からはつきりと見えた。

街が、吞まれる。

人が、吞まれる。

どす黒い邪悪なうねりが、見境なく何もかもを呑み尽

くしていく。

少しも怖くなかった。恐怖(とき)では、私の心は再起

動しなかった。

ぐるぐる、ぐるぐる。

走馬灯のように、記憶が舞い散る。

父。殺人犯の父。

母。死んだ母。

会津。私を捨てた。  
笠原。どうでもいい。

井上。私が殺した。

そっだ、と、どす赤く血に染まった私の手が囁く。

私は人を殺した。

声が、私をうねりへと誘う。

私は人を殺した。

過去が、私を虚空へと誘う。

わたしはひとをころした。

罪が、私を終焉へと誘う。

わたしはどうしてここにいるの？

虚空に飛ぶ。

「管理人さん！」

重力が、私を黒いうねりに叩き落とす。

「管理人さん！！！」

腕に走る衝撃。

「やめろ！！！」

視覚の落下が停止する。見上げる。

「やめろ……っ！」

どす黒い波飛沫が私と、剣さんの両腕を濡らす。

「しっかり……しっかり、掴まって下さい……！」

眼下の真つ黒な渦が遠のく。剣さんの顔が近くなる。

「ここで……死ぬな！」

体が冷たい土の上に横倒しになる。

私の真横で剣さんが荒い息をしながら腰を下ろす。

「管理人さん……僕にはあなたが必要なんですよ！」

垂れ目が屍になれなかった私を射抜く。

「そばにいて下さい！」

大きな手が私の冷え切った手を強く握る。井上の乾いた血がばらばらと落ちる。

「僕は怖いんですよ……だから、どうかそばに……！」  
曇天の下、私の青い頬を彼の涙が伝った。

\* \* \*

ここから先の記憶は、すっぽりと抜け落ちていく。気が付くと私は、体育館の隅で毛布にくるまって縮こまっていた。

「管理人さん。ご飯を持ってきましたよ」

私を呼ぶその声の主は、唯一の入居者だった剣さんだ。

「もう、身投げしようとしなくて下さいね」

「……………ごめんなさい」

私の体は血まみれだけでなく、泥まみれだった。剣さんも泥を被ったみたいだった。真つ黒な泥は、波飛沫だ。

「ここで死んでも、どうにもなりませんよ。ね？」

この男はどこまで知っているのか、それが気がかりだった。聞いた話だと、台所で焼け死ぬ寸前だった私を救い出したのはこの人らしい。私をおぶって高台にあるこの体育館までダッシュしてくれたみたいだ。体育館にはどうにかこうにか津波から逃げ延びた住民がひしめき合っている。

「同居人のことは、その……残念でしたね」

同居人。井上友三。聞いた話だと、食器棚の下敷きになつて事切れていたらしい。

食器棚の下敷きになつていたということは、この人は井上の胸に深々と突き刺さった包丁に気付いていない可能性が高い。そう気付いたのは随分経ってからだった。

「何も食べないより、震えながらも何か食べた方が生き残る可能性はうんと高くなります。一緒に食べましょうよ」

大男は優しく言い聞かせ、クラッカーを二つに割り、片方を私に手渡す。その優しさを無下にできなくて、私

はばさばさの非常食を口に運んだ。口の中はカラカラで、無理矢理飲み込もうとしたら食道で詰まりそうになった。思えば、私はこの時からこの人の優しさにもたれていくのかもしれない。

そんな資格は無い。

そんな価値は無い。

分かっていたはずなのに。

分かっているはずなのに。

こんなに優しくしてくれるのは、初めてだったから。

私が細々と非常食を咀嚼するのを満足そうに見届けた

剣さんは、私の肩に毛布を掛け直した。

絶え間ない余震の中、私はずっと剣さんのそばにいた。

あなたが必要なんです、その言葉に必死に体を預けながら。

\* \* \*

避難生活は長引いた。寒さ、飢え、窓の外の地獄絵図。

邪悪なうねりが去った後、残されたのは変わり果てた

石巻の姿だった。

薄茶けた灰色。絶え間ない悪臭。それが延々と大地を

覆い、冷酷な余震に絶えず揺られていた。

たまに存在する色彩は、大体がひっくり返つたり建物に突き刺さつたりした漁船か、津波からの避難を呼びかけていた消防車の残骸だった。濃い黒色は、その半数くらいがまだ燻つていて薄い煙を上げていた。

このままでは埒が明かないと、内陸に向かって瓦礫を掘り分けることになった。でも、瓦礫を掘れば掘るほど、それだけ死体が出てきた。男、女、子供、老人、数えればきりがなかった。避難所ではいつもどこかで誰かが泣いていた。

死体はほぼ全て、避難所の敷地の一角に並べられた。

どれも海水で赤くふやけ、ひどい有り様だった。五体満足で四肢が揃っている死体はまだ恵まれた方だった。腐臭と粉塵が私の鼻腔を、肺を焼いた。

地獄だった。

その地獄から、井上の死体は見つからなかった。

私はがむしやりに体を動かし、夜は泥のように眠った。

食事、睡眠、排泄、それ以外は機械のようにひたすらに働き、井上の最期を脳内から締め出そうと必死にもがき続けていた。

自衛隊が掘り進めた道と、私達が掘り進めた道を連結するまでには何日もかかった。体中が痛痒かったことに気を取られて、喜ぶ余裕なんて無かった。

\* \* \*

震災から3週間もすると、石巻から去る人間が徐々に始めていた。私は今後の身の振り方を考えると、その度に途方に暮れた。ポロアパートは欠片も残らず、身寄りもない。一人で生きる術なんて持っていなかった。

だから劔さんの申し出は渡りに船だった。彼はしばらくの間、秋田県の実家に戻ることにした。私もそれに誘われたのだ。

井上を殺した事実から逃げることになる、そう考える余裕なんて無かった。私は半ば無意識に誘いに乗り、石巻を捨てた。

秋田までは自衛隊の幌付きトラックに揺られて2、3日かかった。燃料統制などとは見受けられたが、壊滅とはかけ離れた街並みに心が鎮まったことを覚えている。

そこから先は語るまでもない。秋田に移り住んだ私は、劔さんの紹介で居酒屋に職を見つけた。そこから様々な事件に巻き込まれ、劔さんを礼士さんと呼ぶようになり、そして今に至る。後になって考えてみれば、笠原もどう

にかしてあの地獄を生き延びたのだろう。

今に至るまで、井上の死体は発見されていない。それどころか、私が井上を殺した証拠はおろか……殺人の存在すら、全て海の藻屑となって消えたままだ。

\* \* \*

話した。

話してしまった。

私の過去を。

私の罪を。

私の全てを。

礼士さんは黙っていた。怒鳴ってくれた方が、罵ってくれた方がずっと気が楽だった。それでも彼は、何も言わなかった。

どれくらい沈黙が続いただろうか。先に礼士さんが動いた。エアコンのリモコンに手を伸ばし、暖房を点けた。少ししてから、エアコンは暖かい風を吐き出し始めた。

「瑞穂さん」

礼士さんはようやく口を開いた。

私には段々と覚悟ができて始めていた。話す前はあんなに怯えていたのに、いざ暴露してしまつたらすっかり開き直ってしまったみたいだ。腹を括った。

礼士さんの口から飛び出すのは罵倒か、恐怖か、それとも、もう何でもいい、受け止める用意はできている。

「こっちに来て」

意外なほど穏やかに、そう言った。拍子抜けしてしまい、却って体が硬直してしまつた。

「おいで」

礼士さんはゆっくりと体を起こし、ベッドの上にあぐらをかいた。そして、そろそろと両手を広げた。

「ほら……おいで」

理解できなかった。

この人は、私を。

二人も人を殺めた、この私を。

この私を抱きしめようというのか。

この私に微笑んでいるのか。

体が勝手に動いた。気が付くと私は、最愛の人の胸板に飛び込んでいた。ほかほかだった。

「辛かったんだね」

礼士さんはそれだけ言い、私の背中を優しく撫でる。

このままずっと身を委ねていたかった。この人の優しさに甘えて、全部忘れてしまおうか。そう思った。

でも、それはできない相談だ。

「離して、礼士さん」

私は努めて冷たい声で言った。

「ごめん……我慢できない。もう少しだけこうさせて」

礼士さんはそう言い、私を抱く腕に力を込めた。私も抵抗はせず、されるがままだった。

「夢を見たんだ」

私を抱きしめたまま、礼士さんは言った。

「夢？」

「うん。震災の日、僕があなたを助け出す時の夢だった」  
あの薄汚い部屋の夢、私が井上を殺した直後の記憶のようだ。

「今になって思い返してみると、おかしい点はいくつかあったね。瑞穂さんが血を被っていたのは怪我をしたのではなく、井上の返り血。井上の死体からはかなりの血が流れ出ていたけど、それが全て乾ききっていたということは、地震の揺れで食器棚の下敷きになったのが死因ではない。血は凝固しやすいとはいえ、地震直後にあれ

だけの量の血が完全に乾ききるほどの時間は無かった」

私の心を的確に抉りながら、礼士さんは推理を経てあの日の再現を続ける。せめて衝動を和らげようとしているのか、背中を撫でる手を休めはしなかった。

「食器棚の下敷きになって流血に至る可能性は否定しないけど、瑞穂さんが血まみれになるほどの激しい出血に至るとは考えにくい。これもまた、井上の死因が食器棚ではないという説の補強になる」

当たりだ。何もかも。

「笠原は現場を見たのかもしれない。でも、仮に通報したら今までの瑞穂さんへの仕打ちが明るみになる。それ以上に自分も殺されるかもしれない……あの場ではそう考えて逃げたのかもしれない。いつまでも事件にならないから復讐を決めたのかもしれないね」

推理力は相変わらずの切れ味だ。

「……筋が通らない話ではないわね。笠原が井上の最期を知っていたことにも説明がつく。私に殺されるかもしれない、という危惧も礼士さんをネタに私を脅せば抑止力になる」

部屋がすっかり暖まった頃に、礼士さんは少し名残惜しそうに私を解放した。

「礼士さん」

私はきつぱりと礼士さんを見据えた。本当は見たくなかった。見せたくなかった。愛しているから。愛されていると知っているから。

「私ね、さよならを言いにきたのよ」

礼士さんの垂れ目が少し大きくなった。

「別れましょう、私達」

胸が痛んだ。心がどうにかなくなってしまいそうだった。

「……どうして?」

一拍遅れて返事があつた。

「私はあなたに釣り合わない。それに……私みたいな人間があなたと一緒にになって、幸せに暮らす。そんな権利は無い」

分り切っていることだ。私は人を殺した。そんな人間が、愛されながらのうとうと生きることはできない。

「僕のことを嫌いになった?」

「違う!」

礼士さんの質問に、私は大声を上げた。

「私はあなたを愛している! 愛しているのよ! だからこそ……だからこそ、私はあなたと生きることができない!」

礼士さんは黙り、考え込む。私の言葉は止まらない。止めようがない。

「私は幸せになんてなれない。なつてはいけない。だから、あなたと一緒にいることはできない」

私の体から礼士さんの温もりが抜けていく。あんなに愛おしい、あんなに失いたくない温もりが消えていく。それが私にはお似合いだ。

「……どうしても、別れたい?」

僅かに言葉に詰まり、感情を殺す。井上に、笠原に姦された時のように。

「ごめんなさい、礼士さん。私は自分を信じるのができないのよ」

私は私を信じられない。独りぼっちになってから、ずっと。

「……一ついいかな?」

礼士さんが私に呼び掛ける。私を見据えるその垂れ目は、恐ろしく真剣だ。

「瑞穂さんが、その……幸せになつてはいけないという

のは、瑞穂さんが殺人をしたから、という理由でいい?」

そうか。この人は、私が殺人を犯したということ完全に認識している。もう戻れない。

「そうよ」

私の答えに、礼士さんは次の質問を放つ。

「だから、僕と一緒にはいられない。そういうこと?」

この決意が、礼士さんを深く傷付けることになることは分かっている。でも、ここで退くことはできない。私にそんな権利は無い。

「そうよ」

今度は一瞬遅れて、礼士さんは更に質問する。

「だから、僕と別れたい。そういうこと?」

別れたくない。本当は別れたくない。

「そうよ」

躊躇いが語尾に僅かな震えをもたらす。息の根を止めきれなかった感情が返事に僅かな遅れを生む。

これでいい。これでいいのよ。

「嫌だ」

礼士さんが即答した。

\* \* \*

「そんな……駄々こねないでよ」

「嫌だよ、絶対に嫌だよ、僕は。嫌われたわけでもないのに別れるなんて」

僕は動揺を隠せていない瑞穂さんを睨んだ。

「あなた、自分が何を言っているのか分かってるの? 私みたいな人間と別れたくないって」

「よく分かっているよ。僕は瑞穂さんを愛している。瑞穂さんだって、僕のことを愛しているって言ったじゃないか。なのに別れようって、そんな馬鹿な話はないよ」

瑞穂さんは言葉に詰まり、顔を逸らした。僕は畳み掛

ける。

「瑞穂さん、あなたは自分がどんな人間なのか分かっていない」

今度は瑞穂さんが怪訝な顔をする番だった。

「あなたが人を死なせてしまったということは、辛いことだけど事実だ。でも、それだけで幸せになれるなんて、そんなはずはないよ。むしろ逆だ。瑞穂さん、あなたは幸せになることができるし、なつてもいいし、なるべきだ」

彼女は沈黙を守る。

「少し理屈っぽい話になってしまいうけど、瑞穂さんは笠原の件では無罪が決まったんだろ？ 井上の件については、そもそも誰も知らない事だ。だから、法的には瑞穂さんは何も罪を犯していないことになる」

「そ、そうだけど……！」

「つまり」

僕はわざと無視して強引に話を進める。

「瑞穂さんが自分自身を赦すことができるかどうか。話はそこに落ち着く」

ここまで話し切った僕は、一度深呼吸した。

「だからと言って、全部忘れてしまえとは言わないよ。そんなお気楽な事を言えるはずがないからね。それはかなり強い言葉で言うと、瑞穂さんに対する冒瀆だと思つて口調こそ平静を装っているが、内心では結構焦っている。今ここで瑞穂さんに行かれたら、僕は追いかけることができない。そうすると、もう二度と会うことは無いだろう。」

「礼士さん」

「うん？」

瑞穂さんはゆつくりと僕に近寄り、そしてベッドの端

に腰掛けた。

「私がどんな人間なのか分かっていないって、どういう意味？」

僕は少し考え、言う。

「瑞穂さんには、誰かを幸せにする力があるってことだよ」

反応を待つ。考えめぐねているようだ。

「だって、瑞穂さんは何度も僕を助けてくれただろ？ 東京駅でもそうだった。先の秋田駅でもそうだった。瑞穂さんが助けに来なかつたら、僕は間違いなく死んでいたよ」

瑞穂さんが僕のことを手で制した。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど……それは当たり前前のことよ」

「当たり前か。それができる人は強いよ。やっぱり瑞穂さんは強いんだね」

僕は更に続ける。

「でも、それだけじゃないんだよ。僕はあなたが横にいるだけで、とても満たされていた。とても穏やかでいられた。瑞穂さんがいるから、瑞穂さんのことを想ったから、今までの事件も乗り越えることができたんだよ」

想いを吐露する。

「僕は、あなたと一緒にいることが一番の幸せなんだ」

瑞穂さんは少し顔を背けた。

「あなたが人を死なせてしまったことが事実なら、あなたが人を救ったこともまた事実だ。あなたが人を笑顔にしたこともまた、否定し難い事実なんだよ」

耳が赤くなっている。釣られて僕の耳も。でも、ここで話を終わらせるわけにはいかない。

「それで、瑞穂さん。本題はここからなんだよ。あなた

は誰かを幸せにする力がある。でもその力は、どこから生まれてくると思う？」

僕は返答を待った。待つて、待つて、待ち続けた。

「……………私自身が幸せであること？」

長い沈黙の末、瑞穂さんは正答を導き出した。

僕は深く頷き、言う。

「だから、瑞穂さん。僕と別れた方が幸せなら、それでいい。送り出すよ。でも……でも、自分を否定するためには僕と別れるのはやめてほしい。結局、それは何にもならないんだからね。自分を幸せにしないと、自分と向き合うことはできない。幸せから逃げることは、自分から逃げることだよ」

ひと呼吸置くと、瑞穂さんがか細く口を開いた。

「……………やっぱり駄目よ、礼士さん」

「うん？」

彼女は語尾をがたがたと震わせながら、血を吐くように言った。

「駄目なのよ、礼士さん……私はあなたと一緒にいられて楽しかった。幸せだった。でも、あなたは私に出会わなければ、こんなことにはならなかった！」

大粒の涙を浮かべながら、彼女は自分を責め続ける。

「私が犯人なのよ、礼士さん！ 私さえいなければ、あなたは死にかけることはなかった！ あなたのその傷は私がやったのよ！」

荒い息に、彼女の胸が激しく拡張と収縮を繰り返す。

「私は私を信じられない！ 私がいたら、あなたを巻き込んでしまっくんじゃないかって、そう考えるとたまらなく自分のことが憎たらしくなるのよ！」

声を裏返す勢いで自分に呪詛を吐き、頭を抱える。

僕はそつと彼女に近寄り、布団で涙を拭う。ずれた眼

鏡を直してあげて、僕は穏やかに尋ねる。

「瑞穂さん。君は、僕を信じるかい？」

「え……？」

「僕のことをどう思う？」

赤い目をしたまま彼女は逡巡する。

「……あなたは、とても優しく、暖かくて、誠実で……」

……あなたのことが大好きよ、礼士さん」

少し意表を突かれ、頬に血が巡る。

「あなただけは信じるわ、礼士さん。私の全てを賭けてもいい。最初にあなたに抱かれた日から、そう決めたの」

その言葉に、心が緩む。

「……ありがとう」

僕の視界が少し滲んだ。

「そう決めたのはあなた自身だ、瑞穂さん。それでもまだ、自分を信じることはできないかい？ 僕のことを信じる確率瑞穂を信じることはできないかい？」

また、部屋が静かになる。

「瑞穂さんは何も間違っていない。……自分のことを信じることができるなら、きつと分かるはずだよ。今はまだ分からなくても、ゆっくりでいい。いつ分かるはずだ。それまで、僕は待ってるから」

抱きしめたい衝動をぐつと堪える。今、僕の方から動いたら、全てが終わる。一生をかけて愛し抜くと決めた人に、二度と会えなくなる。そう確信していた。彼女から動くまで、待つ。

「どうしても自分を赦すことができないのなら、尚更幸せにならないと駄目だよ。誰かを幸せにすることでしか過去の埋め合わせはできないだろうし、そのためには自分で幸せを掴まないと。それくらいの力が無いと自分と向き合うことはできない」

瑞穂さんは黙ったまま、そつと乱れた髪を直した。

\*

\*

ここから先は言おうか言うまいか迷っていた。でも、勢いに任せて全部言ってしまうことにした。ここで言わないと、二度と伝えることはできない。

「瑞穂さん」

少し間があつた後、彼女は小さく振り向いた。

「僕は、あなたと一緒にいることが一番の幸せだ、そう言ったよね？」

もう一つ頷き、僕に先を促す。  
「僕はあなたに愛されている。つまり、偉ぶって言うと僕はあなたを幸せにできる」

瑞穂さんの顔に驚愕が広がり始める。

「だから、僕は胸を張って言える。今から言うことは、絶対に間違っていない」

彼女の頬が桜色に染まる。  
「瑞穂さん。どうか」

最愛の人の目に、また涙が浮かぶ。

「全部終わったら、どうか、僕と生きてほしい」

しかしその涙は、悲しみの色をしていない。

「僕と結婚してほしい」

\*

\*

幸せにはなれないと、そう思っていた。

幸せになつてはいけないと、そう思っていた。

私は人を殺したから。

なのに……なのに、この人は幸せになれと言う。

私の幸せを心から願っている。

幸せになることが、力だと言う。

誰かを幸せにすることが、赦しだと言う。

だから、一緒に幸せになろうと言う。

だから、一緒に生きようと言う。

「こんなタイミングで、つて思うかもしれない。ずるいよね、分かってるよ」

この人は……。

「でも、本当はずつと前から言おうとしていたんだ。霧降荘に行った辺りから、ずつと」

本当に、この人は……！

「今伝えないと、二度と会えなくなるような気がして……」

「だから、言わせてもらった」

本当に、この刃礼士って人は……！！  
もう我慢できなかった。

私はまっしぐらに、最愛の人に飛び込んだ。

そして、ひたすらに泣いた。

悲しいのか嬉しいのか、全部ごちゃごちゃになって、何もかも分からなくなった。

涙が全てを洗い流すまで、最愛の人は絶対に私を離さなかった。

なかった。

\*

\*

礼士さんが退院する頃には、既に2月の半ばになっていた。退院こそできたが、まだしばらくは通院する必要があつた。当面の間、仕事には復帰できないとのことだ。

私は散々悩んだ末、結婚の申込に対する返事を保留することにした。今もなお、自分を赦す覚悟が、幸せを受け入れる覚悟ができていない。

私は秋田を離れることにした。これは礼士さんからプロポーズされる前から決めていたことだ。ただ、プロポーズされる前は二度と帰らないと決めていた。今は違う。

今は違う。

ここに帰る日が来るのかどうか、分からない。

秋田駅はふんわりと雪を被っていた。みどりの窓口で

切符を買った。とりあえず東京まで出て、後はそこから考える。

礼士さんが見送りに来てくれた。本当は独りで旅立とうとしたけど、さすがに断れなかった。ホームに立つのは約2ヶ月ぶりらしい。

「釜田さんと大和さんの見送り、断ってしまつて良かったの？」

「いいのよ、別に」

居酒屋は辞めた。今は自分と向き合うだけで精一杯だ。

12番線への階段を降りる。吐息が雪のように白い。

秋田は今、一年で一番寒い時期を迎えていた。階段を降りきって凍てついたホームに着いても、列車はまだ入線していなかった。

「どうしても、行くの？」

礼士さんはぼつりと聞く。ホームに女声の自動放送が響いた。

『間もなく、12番線に秋田止まりの列車が到着します。黄色い線までお下がり下さい。この列車は、秋田新幹線』

『こまち28号』東京行きになります』

礼士さんはちらとホームの左右に目を走らせた。さすが、休職中とはいえ現役の鉄道マンだ。

「ええ」

車体のあちこちに雪をこびりつかせた新幹線がゆつくりと入って来る。いつだったか礼士さんが嬉々として話してくれた旧型の列車だ。

「そっか……気を付けて」

ブレーキが軋む音が止み、鮮やかな平仮名で描かれた

『こまち』のマークが私と礼士さんの間で停まる。桜のイラストと共に『ありがとう』とも描かれている。

『どっしたの？』

礼士さんはトレインマークから目を離す。

「ああ、いや……もうすぐ引退するんだ、この列車。いなくなる前に、せめてもう一度運転したいなあって」

そういうえば、この列車に憧れてJRに入ったって言うていた。そう考えると、この列車が私と礼士さんを結んだのかもしれない。

ドアが開く。乗り込もうとする私を礼士さんは呼び止めた。

「これを」

そう言い、ジャケットの内ポケットから紺色の箱を出した。掌に収まるくらいの小ささだ。開けなくても中身は察したが、それでもそつと開けてみた。

「ずつと渡そうと思っていたんだよ」

黒いクツシヨンの中央。指輪は雪の白さを鈍く反射し、その光は私の網膜を刺した。

「要らなくなったなら、捨ててもらつて構わない。ここに帰つてこなくても、瑞穂さんの過去は一人だけの秘密だ。

……それだけは、誓うよ」

そつとケースの蓋を閉じる。今の私にはあまりにも眩すぎる。

「時々はそれを見て、僕のことを思い出してくれると嬉しいかな」

発車メロディが鳴る。

「忘れないで。僕はいつだって瑞穂さんの味方だからね」

「……うん」

私はそつと瞳を閉じる。

「さようなら、礼士さん」

そして、別れのキスを選ぶ。

『ドアが閉まります』

私達の別離を前にしても、ドアに躊躇いは無かった。警笛が鳴る。

窓ガラスの向こうで、礼士さんの口が動いた。そして列車は走り出す。

口付けの感触が薄くなるにつれ、礼士さんの姿は小さくなっていく。

必ず帰るから。そう約束はできなかった。

列車は雪原の中、ぐんぐんと速度を上げる。

頭の中に歌が聞こえる。

♪ いい日旅立ち 幸福を探しに  
子供の頃に歌った歌を道連れに

私の旅は始まったばかりだ。

迷っても、惑っても、この鉄路はどこかに続いている。

\* \* \*

約束はしてくれなかった。

でも、僕は信じて待つ。

そう決めたから引き留めなかった。

そう決めたから抱きしめなかった。

列車は雪の中に姿を消し、見届けた僕は踵を返す。

唇から瑞穂さんの熱が消えていく。

「待ってるよ、瑞穂さん」

僕のリフレインを乗せて、雪混じりの風が『こまち』を追いかけた。

〈第九話に続く〉

\*次回『南風に乗って』（仮題）は三文文集2021年春号に掲載予定です。ご期待下さい。